

研究課題	コーチの機能分析による滑走動作評価と定量的分析の関連性	
研究目的 および 研究概要	<p>コーチング実践の現場においてコーチは、運動観察によって、選手の運動経過の中から本質的な運動徴表を見抜き、運動技術の良し悪しを評価している。この運動技術の観察と評価の方法は、定量的方法としてカメラなどの装置を用いて測定し、運動を客観的に測定可能な数値に置き換えてとらえる方法や視認によって運動経過を直接観察して評価する定性的方法が用いられている（麓，2006）。本研究の機能分析（ゲーナー，2003）は、コーチの視認による定性的方法で当該運動の目的やその場の状況を把握した上で、達成しなければならない運動課題を明確にし、これを達成するための動作を帰納的に取り出し、運動局面や動作のまとまり毎に評価する分析方法である。コーチング実践場面では、定量的方法に重点をおいた観察評価基準も重要であるが、コーチが定性的方法によって観察評価基準についても同様に重要であり、実践現場に即しているものと考えられる。そこで本研究の目的は、コーチの機能分析による観察評価結果と定量的分析による測定結果を関連づけて比較検討し、クロスカントリースキーダイアゴナル走法の観察評価基準で高い推進力を獲得するための滑走動作評価基準と機能分析の特徴を明らかにすることである。</p>	
報告の概要	研究の	<p>被験者は、クロスカントリースキー競技のコーチ23名であり、指導する選手の競技レベル（指導対象要因）から2群（高校生以上群と中学生以下群）に分類した。観察評価対象は、競技レベルの高いクロスカントリースキー男子選手16名であった。これらの選手のダイアゴナル走法の滑走の2試行をビデオ撮影し、ランダムに16試行×2セットの滑走動画に編集した。観察評価基準は、滑走動作の3つの機能局面に対応した8項目（準備局面3項目、主要局面3項目、移行局面2項目）と総合評価の9項目であり、被験者にはそれぞれの機能の高さを5段階で評価させた。また、観察対象となる選手の32試行の滑走速度、ストライド、ピッチ、タイム（800m滑走時間）を求め、それら4つのパラメータ要因について、それぞれの平均値と標準偏差から観察対象選手を上位群、中位群、下位群の3群に分類した。そして、各パラメータ要因と指導対象要因による2要因分散分析を行った。さらに、同一選手の2試行に対する被験者23名の評価得点間の相関分析を行った。</p> <p>主な結果は以下の通りであった。</p> <p>1) 2要因分散分析の結果、指導対象要因に関わらず、4つのパラメータ要因において、9つの観察項目のすべてで主効果あるいは単純主効果が有意であり、滑走速度、ストライド、タイムでは上位群>中位群>下位群、ピッチでは中位群>上位群・下位群の順に高い評価であった。</p> <p>2) 相関分析の結果、全選手の観察評価得点平均値では、全ての観察項目において2試行間に有意な正の相関関係が認められた。それぞれの選手の観察評価得点では、多くの選手の観察項目において2試行間に有意な正の相関関係が認められた。</p>
研究の考察・反省	研究の	<p>本研究のゲーナー（2003）の機能分析に基づく観察評価基準（井川，2021）を用いた観察評価シートは、指導対象としている選手の競技レベルに関わらず、運動課題を達成するための機能と動作を評価することで、実際のパフォーマンスの段階に応じた評価が可能である。コーチング実践の現場でコーチが動作を観察評価する視点として求められるのは、選手の動作を単体の局面や評価基準で評価するだけではなく、ゲーナー（2003）の意味における機能という「動作のまとまり」として評価することに加え、複数のパラメータ要因を組み合わせで観察評価することが極めて重要な視点となるといえよう。したがって、クロスカントリースキーダイアゴナル走法に対する滑走技術の観察評価方法として、機能分析に基づく観察評価基準（井川，2021）の妥当性および信頼性が確認された。</p>

<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>クロスカントリースキーのダイアゴナル走法に対する機能分析に基づく観察評価基準の妥当性と信頼性 コーチング学研究, 36 : (2) 1-12 頁, 受理決定済, 査読有, 2023 年 3 月 31 日 井川純一・藤田善也・鈴木典・水落文夫・高橋正則・青山清英</p>
--	---